

## ともに自分らしく生きられる社会を目指して

社会デザイン学会第13回年次大会によろこそ。

ここ数年間の大会テーマを振り返ってみると、どちらかと言えば、社会デザイン（学）の理論化や方法論に関わる課題を扱って来たように思えますが、ことしのテーマは、ずばり、性とジェンダーです。

なぜ、ずばり、かと言えば、社会をデザインするにあたって直ちに考えなければならない「具体」の課題をストレートに取り上げ、集中的に議論を展開したいと考えたからです。

上記では、とりあえず「性とジェンダー」と書きましたが、その意味するところは多岐にわたります。ですから、1回の大会ですべての課題を扱えるわけでもありません。というわけで、今回扱うのは、公開講演会のプログラムにもあるように、セクシュアル・ハラスメントと「LGBT教育」に関わる諸課題です。

みなさんご存じのように、セクシュアル・ハラスメントも、「LGBT教育」も、いずれもが、現在、職場や教育の現場で喫緊の課題となりつつあるものですが、しかし、現実の場面に目を移して見れば、そうした社会的関心の高まりに見合ったかたちで、正確な情報が共有されているかといえ、あるいは適切な対応がなされているかといえ、まったくそうはなっていない。みなさん周知の通りです。

しかしながら、現実の進み方にくら憤っていても、それだけで世の中が良い方向に変わるはずもありません。新しい社会のデザインを目指して、ひとつひとつ具体的な議論を積み重ね進んで行くより他に道があるはずもありません。

ここで詳細に入ることはいたしません、私たちの社会への認識がじつはそうした具体的な議論の積み重ねの中で確実に深まりつつある、そう信じさせてくれる事実も少なからず生まれつつある、そのこともまたたしかなのです。

私たち社会デザイン学会では、設立趣意書の中で次のように謳っています。

*単なる社会運営上のスキルではなく、人権意識に裏付けられた真に共生的な社会を創成するために必要な理念と知識の明確化であり、また、そうした理念と知識の習得でなければならない。*

ことしの大会テーマではおもに女性と性的マイノリティの尊厳の問題を取り上げていますが、社会デザイン学会の存在理由は、世の中に存在するさまざまなマイノリティの声を聴き、差別と分断の問題を議論し、「真に共生的な社会を創成する」ことにあります。

大会期間を通じて、有意義かつ活発な議論の展開されることを期待してやみません。

社会デザイン学会会長 北山晴一